

四国遍路道研究会報告（第11回）

四国遍路みちにおける、「へんろ転がし」の工学的研究

四国遍路みち研究会

・女体山～第88番札所大窪寺

（第15回現地調査 2017.11.20）

平成29年11月20日に「へんろ転がし女体山越え」現地調査を行った。当日は午前中曇りで

処により小雨の予報、早めの寒波襲来で風の強い底冷えのする日であった。四国クリエイト協会を9時頃出発し、30分ぐらいで前山ダム近くの「道の駅ながお」に到着。現地集合組も含め10名の調査隊である。うち先発隊は、帰路大窪寺からの足確保の配車を準備済という手際の良さで、今回の目的・安全確認等を行い道の駅を10時前に出発。県道志度山川線沿いのダム建設に伴う廃道の立派な「磐根橋」親柱石を記録、さらに進むと突然ストーンガード奥からお猿の歓迎を受け



親柱石「磐根橋」と説明板

さらに南下。女体山・昼寝城跡方向の矢印標識で左折し、草ぼうぼうの耕作放棄地が広がる小川沿いを進み、赤・黄色真っ盛りの紅葉を横目にすぐ近くの多和神社に参拝、神社境内はイノシシに表土を掘り起こされまるで耕作地状態である。



間伐材等丸太土留階段

今回の調査中にイノシシに出くわさないことなどを祈願。ここまでと林道の起点となる昼寝城跡分岐（標高323m）までは、へんろ転がしの区間がなく平坦な集落道であった。

林道を進むと太郎兵衛（たろべえ）という地名のところがあって、いよいよへんろ転がしの始まりである。昔、行基菩薩が庶民の苦難を救うために布施屋を設けた所と伝えられている「古



岩山遍路道

大窪（ふろくぼ）」と呼ばれている北西斜面にでる。

林道をショートカットする形でへんろ転がしが三区間ある。このへんろ転がしには、間伐材等の丸太を利用した土留めの階段が多く、最初の坂道は標高差約100mで、一気に急な坂ではなかったもののかなり厳しいへんろ転がしであった。再度、林道に戻って暫し体調調整の休憩したその最中、軽快な

足取りですぐ後を追って上がってきたお遍路さんがいた。タンザニア出身の女性で、不自由な外国語ではなく流暢な讃岐弁でさっそく交流、手持ちのアメなどでお接待し記念写真をお願いした。



縦断図

さて、次のへんろ転がしでは、路肩が崩壊しロープでの注意喚起があったが、谷側よりも、山側に手すり方式のロープを張ったほうが安全性は向上すると判断し、ここは危険箇所として登録した。途中、がけ崩れで迂回路が新技術・新素材で整備されているところがあり、世界遺産登録時には自然素材による再修理が必要だろう。



女体山からの絶景

いよいよ女体山山頂を征服すべく最高峰に臨む。この頂上（標高774m）への遍路道が、これまで14回へんろ転がしを調査してきたなかで、最強の坂道であった。実際、手足を使って三点支持でしか登れない岩山が続いた。すでに時間は12時半を過ぎている。鉄筋アンカーの手すりを伝い登りし、頂上に立つ。この休憩所で各自持参の軽食でエネルギー補給。風が強くて体が冷えてくることからそこそこに出発。若干の下り坂で林道に出る。

ここから最後のショートカット大窪寺まで降りていく。ひたすら降りていく途中、階段清掃を行っているボランティアの方に遭った。大窪寺境内まで登り下りの作業で1時間程かかるらしい。

一行は黙々と大窪寺境内を目指し、15時前本堂到着。無事へんろ転がしを歩けたことをお礼に参拝し、紅葉の山門を下る。遅めの本格的な昼食は、八十八庵で「打ち込みうどん」を堪能・・・「ウマイ」冷えた五臓六腑が生き返る。暫しのご苦労談義、これまでの遍路道に比べて道標や丁石が見当たらなかったこと、結願間近のお遍路行程でこのような危険なコースが本当に遍路道だったのかがちょっと不思議であり、今後の追跡調査が望まれる。



平面図



大窪寺山門前調査団